

テーマ「『現代社会』の指導計画とその実践をめぐって」

「現代社会」の基本的性格と指導計画

筑波大学教育学系 梶 哲 夫

1. 「現代社会」における指導計画

(1) 創意工夫に基づく特色ある単元構成

「現代社会」は、小・中・高一貫の構想に基づく新教育課程の基本的性格からの要請と高等学校社会科が自らのうちにもっていた諸矛盾の解決を目指して成立した新科目である。そして、このことは、社会科カリキュラムの変遷史において、きわめて注目すべき意義を提起しているの⁽¹⁾である。したがって、この意義を十分に認識することが不可欠であって、これをぬきにして「現代社会」について論究することは問題があるというべきである。「現代社会」は、人間尊重の精神と科学的な探究の精神を根本として、生徒が自らの課題として、社会と人間にかかわる基本的な問題に取り組み、判断力の基礎や生き方について自ら考える力を養うことをねらいとしている。この「現代社会」のねらいと科目の基本的性格から考えるならば、「現代社会」の展開に当たっては、創意工夫に基づく特色ある単元構成が望ましい。全国版といてよい教科書に全く依存し、その教科書の構成通りに学習を展開するというのでは、「現代社会」の本質からいって不十分といわざるをえない。つまり、生徒の実態や地域社会を背景とした単元構成の工夫などは欠くことのできない配慮といてよい。

(2) 実施初年度にみられる一般的傾向

周知のように、「現代社会」は昭和57年度から実施の段階に入った。この実施の初年度における一般的傾向については断定することはできないが、魚住忠久氏が愛知県における実態調査を背景として、次のように指摘しているのが注目される。すなわち氏は、「現代社会」を「一年間にわたりどう授業展開するか⁽²⁾の設計図を描くことは、想像以上に大変なことで大綱的な枠組、支柱を示す学習指導要領に沿いつつも実際には、担当する教師の力量に負うところがきわめて大きいといえる」と指摘するとともに、調査結果として、年間指導計画案づくりがどんな方法で進められたかについては、「採用教科書、教師用指導書に基づいて作成が80%と圧倒的に多い」ことを明らかにしている。そしてこのような傾向について、「現代社会」の「複雑多岐の内容や学際的性格を考えると独自の研究(しかも個人研究が中心)での対応の帰結としては当然のことな⁽²⁾かも知れない」と述べているのである。つまり、この調査によると、まだ個人研究が中心でしか

も教科書依存が顕著であるというのが実態なのである。いうまでもなく、この愛知県のみ調査によって全体を断定することはできない。しかし、初年度の状況に限るならば、かかる傾向がかなり一般的にみられる現象であることも否定できないのである。

ところで、この一般的傾向がいかに著しいとはいっても、一方において、小西正雄氏(兵庫県立星陵高等学校)に代表されるきわめて意欲的な指導計画の構想と実践が存在することも事実である。氏の指導計画は、「現代社会」の内容のうちの“現代と人間”“人間生活における文化”“青年と自己探究”“現代に生きる倫理”の四項目の範囲を中心としたものではあるが、示唆に富む単元構成となっている。⁽³⁾

この指導計画は、「現代社会」の内容全体にわたるものではないが、実施の初年度においてこれだけの創意工夫に基づく実践を展開したということは、「現代社会」の今後の動向に対して重要な展望を与えてくれている。また、岩手県立教育センターの前田良治氏の実践研究も注目される必要がある。氏は、「現代社会」の“人間生活における文化”について、「ひとりひとりの課題意識を高める社会科指導の在り方 — 授業途中の評価と教材提示の連動により意外性を高める指導の工夫から — 」というテーマを追求し、実験群と対照群を設定して実験研究を実施している。この研究は積極的に実験授業を試みることによって、その指導の在り方を追求しようとするものであって、注目に値する。このような実験研究によって、指導計画の具体的な在り方が吟味されていくことは望ましいことであって、今後の着実な積み上げが期待される。このほかにも、昭和58年度日本社会科教育学会第33回全国研究大会において大庭茂美氏によって発表された「現代社会」の実践内容など「現代社会」を育成する努力が存在していることを指摘しておきたい。⁽⁴⁾

2. 指導計画をめぐるこれからの課題

(1) 特に配慮すべき諸点

「現代社会」の指導計画の作成に当たっては、従来の社会科における指導計画作成上の一般的留意点を十分考慮に入れるとともに、特に、上述してきたような観点に加えて次の諸点が考察されなくてはならない。

第一は、中学校社会科学習との関連についてである。中学校の地理、歴史、公民の三分野の教科書を「現代社会」の教科書とともに用いるくらいの姿勢で考慮していくことが必要と考える。そして、中学校の学習成果を十分に活用し、ゆとりを産みだして「現代社会」の学習が生徒自らのものになるように工夫したいものである。

第二は、高等学校社会科における選択諸科目への有意義な基礎としての学習が展開されるような工夫を指導計画の各単元において配慮することである。つまり、日本史、世界史、地理、倫理、

政治・経済の諸科目に対する真の学習意欲を起こさせる配慮を指導計画の各単元の中に工夫することである。このことは、各科目の学習の本質にかかわることがらを追求し、それらにかかわる学習体験が可能になるよう、指導計画の中において工夫することを意味する。そして、それは、社会科における各科目の本質を問い直し、その存在理由を改めて明らかにすることにほかならない。

第三は、ホームルームの指導との関連についてである。ホームルームにおいては、① 集団生活の充実に関すること、② 学業生活の在り方に関すること、③ 進路の適切な選択決定に関すること、④ 健康で安全な生活に関すること、⑤ 人間として望ましい生き方に関すること、を取り扱うことになっている。そして、「特別活動」の内容の取扱いにおいては、「ホームルームの五つの事項相互の関連を図るとともに、社会科、特に「現代社会」との関連を図り、道徳性の育成に資すること」が指摘されている。したがって、「現代社会」の指導計画において、その学校のホームルーム指導の指導計画との関連に留意し、実践において、その相互関連を図っていくことが肝要である。

第四は、地域社会に根ざした単元構成の工夫や、地域社会からの教材の発掘などによって指導計画の充実を図るという点である。生徒が自らの課題として取り組むためには、地域社会からの具体的な生きた教材が望ましいことはいうまでもない。この点において、全国版の教科書には限界があることはやむをえない。教科書の問題点をいうよりは、積極的に地域社会から教材を発掘し、地域社会を背景とした単元の工夫などに努力したいものである。

(2) これからの課題

ところで、以上のような方向を目指すには、社会科教育学がこれまで積み上げてきた理論的、実践的研究の諸成果が改めて吟味され、活用されることが望ましい。社会科の成立以来今日までの変遷において、初期の「一般社会」をめぐる研究成果、主として小、中学校の社会科に関しての諸研究成果など多くの成果が蓄積されてきている。これらに注目して再吟味してみるならば、「現代社会」を考察していくうえで多くの手がかりを得ることが可能であると考えられる。「現代社会」によって、社会科成立以来今日まで多くの人々によって努力されてきた社会科教育学形成への成果が試みされているともいえることができよう。「現代社会」が提起している諸問題は、決して新しいものではない。むしろ、社会科の本質を問い直し、この「現代社会」を契機として、社会科の新生が目指されているともいえよう。したがって、「現代社会」の問題は、単に高等学校社会科だけの問題ではなく、小・中・高を通しての社会科という教科の根本問題なのである。

このような点に注目するならば、高等学校における共同研究のみならず、小・中・高を通して

の共同研究, さらに, 社会科教育学の形成にかかわる人々と現場の人々との共同研究が期待されているのである。そして, このような方向が, 今日の学校教育の直面している課題に対して, 重要な意味をもっていることに留意したいものである。

<注>

(1) 拙稿「社会科カリキュラム理論の動向と課題 — 社会科カリキュラム変遷史における「現代社会」の意義を中心として — 」(日本社会科教育学会編「社会科教育研究」№44, 1980)

(2) 魚住忠久「高校「現代社会」の展開とその課題 — 愛知県における実態調査より — 」(愛知教育大学教科教育センター研究報告第7号, 1983)

この論文は, 昭和57年6月から7月にかけて, 愛知県立全日制高校「現代社会」担当教師を対象に実施した「高等学校「現代社会」の指導に関する調査」をもとに論究されている。氏は, この調査, 研究のねらいの一つとして, 「『現代社会』という一科目をかりて, 学習指導要領の改訂, 科目の新設といった事態が関係者, なかんづく高校教育の場にある者にどう受けとめられ, 改訂の趣旨や新科目の目標, 内容の具体化, 実践化されていったか(いくのか), すなわち, 学習指導要領理念の受容過程を明らかにすることにあつた。」と指摘しているが, この視点からの調査研究が, 各都道府県において実施されることが将来のために必要だと考える。

(3) 小西正雄「『現代社会』の探究法的単元構成」(日本社会科教育研究会編「社会科研究」, №31, 1983)

(4) 大庭茂美「元型構造下の「現代社会」授業実践の点検」

作業単元を中心とした「現代社会」の年間指導計画

学習院女子中・高等科 高柳英雄

「現代社会」の年間指導計画をどのように構想するかということは, 「現代社会」という科目の特質をどのように捉えるか, ということと密接に関連してはならない。

つまり, 「現代社会」の特質を充分生かすような年間指導計画が望まれる, と言えよう。

(1)「現代社会」をどう捉えるか。

「現代社会」が高等学校で教えられるようになってから二年が経とうとしている。私自身二年間, この新科目とつきあってきて, つくづくと難しい科目であると思わざるを得ない。「こんな厄介な科目, 早くなくならないかなあ」との嘆息も, しばしば耳にする。

新しい内容の教材研究などに骨を折っていると, 本当に厄介だと思う。しかし, 同時に, 「現

代社会」という科目は、社会科という教科の歴史や、種々の問題点や課題を残さず備えている試金石ではないか、と思う。今、我々は、「現代社会」という形で、戦後社会科の遺産をどのように受け継ぎ、社会科の歩みをどちらに向けるか、を問われているのではないだろうか。

では、「現代社会」の特質とは何だろうか。私はそれを、次の五つの点から把握している。

- ① 総合的な科目
- ② 「how to ～」の重視
- ③ 過程の重視
- ④ 生徒の自主的かつ多様な学習活動を保障
- ⑤ 抽象的な学習に深入りせず、具体的、経験的な学習を重視

このように「現代社会」の特質を捉える時、その意義を十分に発揮しうる学習展開は、いくつかの作業単位（問題単位）によって、「現代社会」の広範な内容を整理・統合しておいて、あとは生徒達の追求の筋道に出来るだけ沿いながら、学習を進めていくという方法が最も望ましいと思われる。

(2) 4つの作業単位

そこで、ここでは4つの大きな単元を設定し、それに「現代社会」の主な内容を関連付けるという方法で、年間指導計画を立案してみた。

4つの単元を設定するに際しては、まず授業で用いる教科書の内容を項目のレベルで検討し関係性の強い内容のものをまとめる。ついでそれらのまとまりをあくまで総合的に学習しうる具体的で、なるべく身近であり、尚かつ up-to-date な材料はないかと探求して、見出したものである。

単元1「なぜ非行はおきるのか」の場合を例にとるならば、ここでは、「なぜ非行はおきるのか」という問題の解決を目指して学習は進められていく。具体的には、次のような展開が考えられよう。

Q1 青年期の諸問題の中で、一番大きな問題は何だろう。（生徒：非行である。）

Q2 非行とは何か。

- 「非行」と「不良」
- 身の回りの非行
- なぜ「非行」が問題とされるのか
 - 低年齢化 ◦ 中流化 ◦ 「古典的非行」と最近の非行

Q3 なぜ非行に走るのか

- 発達の問題としての非行
- 第二の誕生

Q 4 なぜ非行が生まれるのか

- 社会病理としての非行
- 非行の土壌としての家庭・学校・地域社会・現代社会

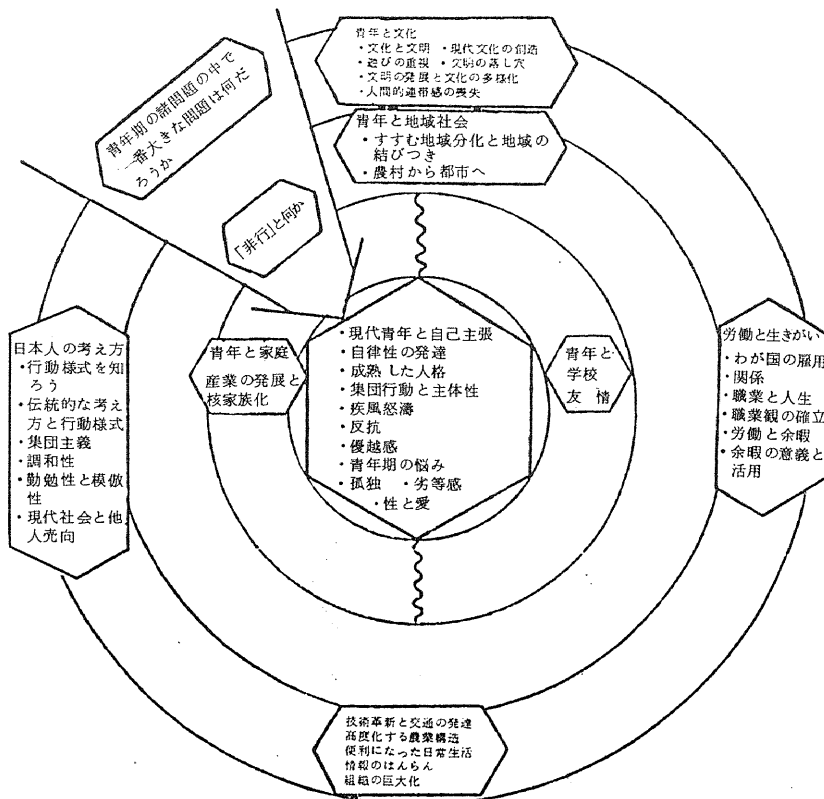
Q 5 非行をなくすにはどうしたらいいか。

Q 6 自分自身が非行に走らないようにするには、どうしたらいいか。

これらQ 1からQ 6までの問題を中心に学習をすすめ、最終的には、図1のような内容を取り扱っていく。

内容を取り扱う順序や、個々の内容の学習に要する時間などは、それぞれの学習集団によって相当変わってこよう。決して網羅的学習ではなく、学習者の興味・関心の赴く方向に学習を進めていきたい。

図1. 単元1「なぜ非行はおきるのか」の展開例

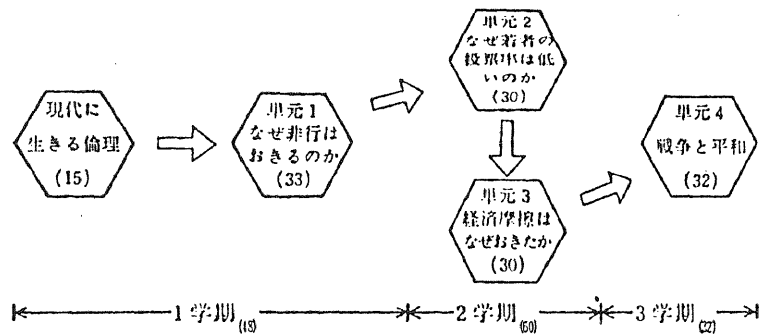


こうした学習展開における多様性を保障していくことが、本当の意味で、「総合的」な学習につながるのではないだろうか。

(3) 全体の流れ

図2は、4つの単元の配列である。()内の数字は授業時数)ここでは、便宜上、一定の順序を想定しているが、必ずしも、この通りである必要はない。例えば、今年度は、6月に初めて比例代表制を導入した参議院議員通常選挙があったので、単元2を最初に取り扱った。このような融通性を計画には、常に持たせたい。

図2. 4つの単元の配列例



内容の性質から、「現代に生きる倫理」に関する内容は独立して、まず最初に学習させる。この中で、特に「現代社会」の科目としての特徴を説明し、「学び方」「調べ方」「ものの見方」「生き方」など、方法や過程を重視する科目であり、「自分達で進んで学んでいかなければならない科目である」ことをわからせておきたい。

単元1から単元4までは、一応、単元1が自分自身の問題、単元2及び3が国内の問題、単元4が国際的な問題となっているが、学習の順序は、この限りではない。

〔紙幅の都合で、展開例等について詳述出来ない。詳しくは、小林信郎・梶哲夫編『「現代社会」の単元構成と展開』(明治図書)を参照されたい。〕

•おわりに

二年間の「現代社会」の実践を踏まえて、「総合的な社会科」としての「現代社会」の困難さを改めて痛感している。そして、この痛感を基盤にして、私の勤務校では、公民や政治・経済、倫理との関連を考えながら、「誰がやっても、ひと通りは教えられる」教材群を開発していこう、ということで歩み始めつつある。VTRやスライド類、あるいは新聞記事等をうまく活用して、マスター・プランを単元ごとに作成していこうというのである。そのプランが出来上がった時に

は、新たな改正の必要にせまられていると思うが、ともかく一歩ずつやっていくしかあるまい。「現代社会」は緒についたばかりである。

「現代社会」の指導計画とその実践をめぐって

都立小金井北高校 古山良平

1. 新教育課程の比較

本校の属する92グループの各校における社会科の新教育課程は、だいたい次のようである。まず一年次「現代社会」4単位必修は共通している。次に二年次では、学力的に上の学校では、「世界史」か「地理」(4単位)の選択必修を導入している。だが大部分の学校は選択制導入は三年次からで、「世界史」と「地理」の両方か片方が必修である。単位数は1科目だけで4または3。2科目だとそれぞれ2または3で、合計で5以下である。三年次では殆どの学校で「日本史」が必修である(3~5単位)。「日本史」が選択必修(4~5単位)のところも若干あるが、ここでは「世界史」が必修(2~4単位)になっている。「日本史」が必修のところでは、だいたい「現代社会」と「日本史」以外の全科目が、選択必修または自由選択である(1科目2単位。)なお三年次の選択科目で「政経」と「倫理」が開設されていないところも見受けられるが、そういう学校では推察するに、一年次の「現代社会」4単位を、従来の「政経」・「倫社」で読み換えているものと思われる。また実際に、「現代社会」を設けずに、「政経」と「倫社」で2単位ずつ置き換えているところも一校ある。また二年次の社会科授業時数が3(「世界史」のみ)だったり、一年次で「現代社会」4単位を設けながら、三年次でも「政経」2単位を必修にしていたりするところもあるが、それはその学校独自の指導方針に加えて、その学校の教科担任構成の事情に因るものと思われる。それから、「特別実践活動」の時間を設けている学校は約半数で、あとの半数の学校では授業に充てているようである。

2. 本校の新教育課程

さて本校では、一年次「現代社会」4単位必修。二年次「地理」4単位必修。三年次「世界史」4単位必修。「日本史」4単位選択必修。そして「現代社会」以外の全科目が2単位ずつ自由選択になっている。「地理」4単位が二年次で必修になっているのが特徴的であるが、これは二年次社会科の授業時数が4しかとれなかったこと、教科の専門性を生かすこと、そして「現代社会」設立の趣旨を生かして、受験に関わりなく全ての科目を教養育成のために学んでもらうこと、な

どの趣旨による。だが三年次に「世界史」と「日本史」の計8単位+ α (文化系の場合)を同時に勉強しなければならない負担は、課題として残っている。

3. 本校の「現代社会」の指導計画と実践

「現代社会」の使用教科書は学研、資料集は東学で、年間指導計画案は教科書の目次どりの立案である。担当は、一年目は従来の政経・倫社・地理の三人、今年は政経・倫社の二人である。完成年度以降は、一応政経・倫社の二人で継続して担当していく予定である。これは、当初の理念とは違って教科書の内容が「政経」・「倫社」中心になってしまったためである。しかし教科会の席上で「現代社会」という科目の性質を論議し尽くした訳ではなく、各科目持ち回りで各科目なりの個性的な「現代社会」を担当していく余地もまだ残されている。

ところで、主体性のない教科書の目次どりの年間指導計画立案は、新設校の忙しさと己れの不勉強のためである。教科担任どうしで若干の情報交換は行なったが、全体的な取り組みに対する勉強会は開けないままスタートしてしまった。その結果として一年目の反省は、自分の授業に限って言えば次のようである。私の従来の担当は「倫社」だが、教科書の目次に忠実なためと、非専門分野で予習が大変だったこともあって、政経分野に年間授業時数の大半を費してしまい、倫社分野は上っ面をなでて終わったり、割愛してしまった。全体的に統一的な視点を持ち得ず、わかりにくい授業になってしまい、生徒が主体の授業には程遠かった。また、青年期に関する一指導案がある機会があって作成していたが、上述のような事情で、指導案どりの授業を実践することはできなかった。

このように、たいした計画もなしにスタートしてしまったことが、よけいに混迷の度を深める結果になってしまったようである。しかし、一年目、二年目と予習をし、授業をしていく中で、ようやく統一的な視点をわずかずつだが見い出してきた。今年もすでに前半の政経分野にかなりの時間を割りつつあるのだが、統一的な視点を見い出すためには一単元の授業の準備に、ともすると新書版や単行本二～三冊のかなりつっこんだ学習が要求されるので、早くノートの蓄積をしなければと思っている。私の場合はまだ新卒三年目なので、これはここ当分の課題である。

ともあれ、初年度の指導計画と実践は反省することばかりで、この論文で紹介できるような内容がないのだが、授業実践の中で形成的に見い出してきた視点も新たに加えながら、以下に「青年期」の一指導案と実践の反省(過去2年間の旧教育課程「倫社」での青年期の授業実践も含む)を記すことにする。

4. 青年期の一指導案

エリクソンのアイデンティティ論を援用して、青年期の発達課題を「アイデンティティの確立」としてとらえる。発達課題とは、子供から大人への自立を達成する自らの実践的課題であり、主体的な自己探究による主体的な自己の確立あるいは自覚的な自己形成ということである。

まず、「現代の青年の心理的・社会的諸問題」の展開では、“自己の姿の客観的把握に基づいた成長の課題の自覚”を心がけさせる。次に「適応と個性の形成」の展開では、“全体の状況判断と役割を自覚した各自の責任ある行動”を心がけさせる。その際、具体性や現実感を持たせるために、グループで青年期の悩み・不安・不満などを話し合わせたり、ホームルーム活動での学校行事への取り組みなどを考えさせる。それぞれの項目の展開のねらいは次のようである。前者では、悩み・不安・不満などを抱えた不安定な自己を客観的に認識させ、その不安定さが大人としての自立・成長への過度期ゆえに存在するものであり、悩まなければ成長しないということに気付かせる。そしてそれを自らの問題としてとらえさせ、自らの生き方を考えてゆききかけとさせるのである。次に後者では、社会参加における自己と他者との調和の問題を考えさせる。社会への望ましい適応と、なおかつ自己を生かすような個性的な自己形成の問題であるが、単なる現状一辺倒な適応ではなく、望ましい自己形成へ向けての自己改造と同時に、その中で望ましい自己を形成していけるような望ましい社会形成へ向けての環境改造をも考えさせていかなければならない。

ゆえに、大人への自立・成長という自らの実践的課題としての青年期の独自性を強調しつつも、科目としての「現代社会」の中での青年期学習の位置づけを明らかにしなければならない。つまり、全体の状況判断と社会参加という観点、あるいは自立を阻むモラトリアム期間の延長の原因分析という観点から、「現代社会の特色」の学習。次に国際化した現代社会の価値の多様化と文化の相対性という観点から、「人間生活における文化」の学習。価値観の混迷を深める原因ともなった、“生産優先の原理から生活優先の原理へ”という観点から、「現代の経済社会と国民福祉」の学習。そして、主体的な社会参加と基本的人権の尊重を前提とした社会契約論を土台にした法治国家の成立という観点から、「現代の民主政治と国際社会」の学習。そして最後に、混迷する現代社会の中での価値観や人格の形成という成長の課題の観点から、「現代に生きる倫理」の学習がある。このように全ての項目が、主体的な自己探究による自覚的な自己形成という青年期の生き方に結びついている。

ところで授業実践の視点としては、問題の本質を追求することを基軸にした人格的な応答関係を保つ、“対話(ディア・ロゴス)”を心がけたい。生徒に「汝、自身を知れ」と内面の自己探究をさせるためには、相手の理性や人間性を尊重した“産婆術”が必要である。そのためには、普段の受容的・友好的人間関係の維持が大切である。それによって、悩み・不安・不満などの話

し合いも真面目で有意義なものとなる。

5. 青年期の授業の反省

新卒一年目はまだ指導案もできずに、統一的な視点を持たぬままに授業を進めてしまったが、無担任で友達気分で生徒に接し、友好的な雰囲気ですぐに生徒に接し、授業を離れてもいろいろと話し合うことができた。二年目は担任をもつようになって距離を置いて接するようになったせいか、(合唱祭・文化祭などにおけるクラス経営のまずさも手伝って)あまり活発な「悩みや不安」についての話し合いができなかった。また倫社での2年生のあるクラスでは、時間の都合上話し合いをせずにアンケート処理で済ませてしまったが、生徒の正直な内面の吐露に対しては、誠実に応答しないと非常に気まずくなる。やはり、人間関係・コミュニケーションが第一である。また話し合いの結果、学校の規則に対する不満などはかなり出てきたが、生徒会活動は非常に不活発で、主体的な参加の姿勢をいかにもたせていくかが今後の課題である。その一環として、公の場での論理的自己主張能力を育てるために、論述問題を継続して出題しているが、これからは討議形式を青年期以外の項目の授業でも、もっと活発に取り入れて、“理想社会の建設”というテーマで、教科書全編を青年期の生き方という実践的な課題に結びつけて考えさせていきたい。